

会話の定量的な分析による 異文化コミュニケーションを促す環境の形成



実験概要

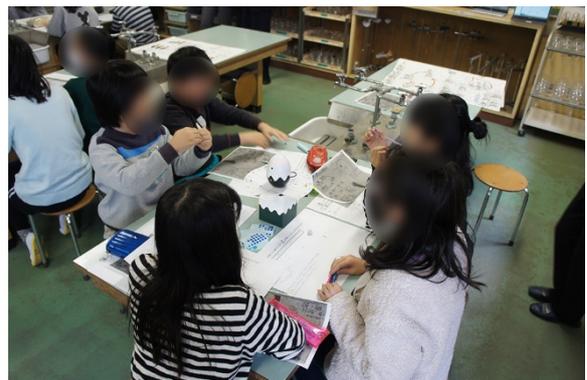
本実験は、発言者の会話を可視化し、学校での子ども同士の会話を定量的に把握することを目的としています。

実験内容

市川市の小学校での話し合いの授業において、児童の会話を録音し、グラフ等の可視化データとして出力する装置を用いて、会話を定量的に把握する実験とアンケートを実施しました。

【大野小学校】 時程：2、3時間目 教科：道徳 対象：3年生 7グループ

【中山小学校】 時程：3、4時間目 教科：理科 対象：6年生 8グループ



実施スケジュール

- 2019年 9月上旬：全体設計
 10月上旬：実証実験実施校募集のための計画策定
 10月16日：校長会に参加し、実証実験実施学校募集告知
 12月上旬：実証実験実施校決定
 12月17日：実証実験実施校との打合せ（大野小学校）
- 2020年 1月21日：実証実験実施（大野小学校）
 2月13日：実証実験実施（中山小学校）
 2月下旬：実証実験結果を踏まえた議論

実験結果

児童からのアンケートでは、「たくさん話したと思ったけれど1番少なく話していて、おどろいた。」「自分は少ししゃべりすぎたかもしれない」「〇〇さんがあまり話せていなかった」「3人ともバランスよくはなせてよかった」など、これまであまり意識していなかった議論の仕方について、意識することができたとの回答を得られました。

本実証実験の成果と意義

参加した児童の発言が可視化されることで、児童が自分の発言量を客観的に振り返り、喋りすぎた児童の発言量が減ったり、逆に普段無口な児童の発言量が増えるなど、一定の効果を確認することが出来ました。

今後の展望

別の活用方法として、教員の初任者研修（1-3年目）への活用が考えられます。授業における教員の発話において「教師が1回に話す長さは最大5分」という目安や、「全体への説明・児童からの意見の吸い上げ・グループワーク指導の3つのバランスを適度に保つ」などのポイントがありますが、経験の少ない先生にとっては、これらを意識しながら授業をすすめることは難易度高いと考えられます。そこで、経験が浅い先生にむけた研修（初任者研修）でハイラブルの技術を導入し、たとえば経験豊富な先生の発話と、経験の浅い先生の発話を可視化、比較し、これまでなかった発話の長さや誰に向かって話しているのかななどの客観データとして活用することで、より初任者の先生の理解を深めていけるのではないかと考えています。